

2010年6月22日（火）

名古屋大学中央図書館

高橋公明・大学院国際開発研究科

「混一疆理歴代国都之図」と「海東諸国総図」

1 地図の分解と合成

- 地図テキスト：ある時代、ある地域、ある人々の地理的世界観を表現したもの。
- 古地図：繰り返し転写。一部を分解。他の地図との合成。新たなテキストの生成。
- 地図①「海東諸国総図」（海1）：申叔舟編『海東諸国紀』（1471年）
- 地図②「混一疆理歴代国都之図」（混1）：龍谷大学図書館所蔵（1470～1480年代）
- 両地図とも、朝鮮起源ではない地図の合成によって生まれたテキスト。
- 分解については、いわゆる書誌学的研究が豊富にあるのに対し、合成については、研究の蓄積は薄い。

2 『海東諸国紀』のなかの「海東諸国総図」

- 「海東諸国総図」：「日本国図」、「日本国西海道九州之図」、「日本国一岐島之図」、「日本国対馬島之図」、「琉球国図」（海2－海7）の合成（田中健夫、1997年）。
- 特徴：「夷島」（北海道）、九州の地形、大小の島々、宍岐・対馬の地形・縮尺・地名情報、琉球の地名、海路。地図上の地名と『海東諸国紀』の記述との一致。

3 「混一疆理歴代国都之図」と混一系世界図

- 4点の混一系世界図：①「混一疆理歴代国都之図」（龍谷図、混1）、②「混一疆理歴代国都之図」（本光寺図、長崎県島原市本光寺、混2）、③「大明国図」（天理図、天理大学図書館、混3）、④「大明国地図」（本妙寺図、熊本県熊本市本妙寺、混4）、参考：「大明混一図」（中国第一歴史档案館）
- ①と②はユーラシア大陸の北限がなく、③と④はユーラシア大陸が海に囲まれて四周がある。
- ①と②にある権近の跋文によれば、最初の企ては「建文四年」（1402年）で、地図の素材は、明らかにもたらされた清瀆「混一疆理図」と李沢民「声教広被図」である。両者ともに、元末明初、「大明」地域で活躍した（宮紀子、2004年）。そこに朝鮮図と日本図が追加されて①と②の原型ができた。
- 「声教広被図」：混一系世界図のなかに、アフリカ大陸、ヨーロッパ、地中海、アラビア半島などユーラシア大陸の東から見ればかなり遠方まで描き、かつ中国で南海諸国と呼ばれている現在の東南アジア・南アジアに関する多くの地名を海のなかにちりばめることができた。イスラム系の世界図からの情報（高橋正、1963年）。
- ①、③、④は朝鮮で作成されたと考えられる。②は日本で作成された可能性が高い。対馬島と日本図の描き方。
- 混一系世界図：アフリカ大陸、ヨーロッパ、地中海、アラビア半島などユーラシア大陸の東から見ればかなり遠方まで描き、かつ中国で南海諸国と呼ばれている現在の東南アジア・南アジアに関する多くの地名を海のなかにちりばめることができた。地図を合成した技術だけでなく、それを構想した地

理観が高く評価できる。

- 中国の地図帳『廣輿図』の「東南海夷図」と「西南海夷図」：李沢民図系地図で7版まで出版された。しかし海についての情報は追加されず。一方、混一系世界図では、龍谷図から本光寺図、そして天理図・本妙寺図と海のなかの地名は豊富になっていく。これは海の彼方について関心が、時代を下っても保持されたことを意味する。

4 朝鮮製地図帳『輿地図』

- 朝鮮後期に『輿地図』『朝鮮地図帖』『広輿図』等のさまざまな名前の地図帳が大量に作成された。
- 白黒の木版印刷、彩色の手書きなど作成法は多様だが、地図の構成についての共通点は多い。「天下図」、「中国図」、「朝鮮図」、そして「日本図」や「琉球図」も含む。
- 「天下図」：Ledyard は「天下図」の内部に描かれた地形と天理図の比較を通じて、混一系世界図から天下図への変遷を仮説として示した (Ledyard, 1994)。
- 「日本国図」「琉球国図」：『海東諸国紀』の「日本国図」「琉球国図」からの影響 ((海野一隆、1978年) とされているが、『輿地図』の「日本国図」の西側には、北から「対馬島」、「一岐島」、「薩摩島」(九州)、「硫黄島」そして「恵羅武島」までが描かれているのに対し、『海東諸国紀』の「日本国図」には中国地方以西は含まれておらず、ここからは『輿地図』の「日本国図」を生み出すことはできない。むしろ、『海東諸国紀』の「海東諸国総図」から朝鮮半島南端と琉球国周辺を削除した構図と解釈するほうが理解しやすい。
- 『輿地図』の「日本国図」と「琉球国図」：元図から転写されたとき、南北が逆転した。済州島図と同様に、中心から周縁、あるいは内から外への視線、というような解釈が可能になる (高橋公明、2003年)。
- 混一系世界図と「海東諸国総図」：後世、『輿地図』という数多くコピーされた朝鮮製の地図帳のなかにそれぞれの子孫を残すことになった。より正確には、そのような解釈が可能な地図が残された。

<参考文献> (一部)

- 高橋公明「テキストとしての済州島地図」研究代表者荒野泰典『グローバリゼーションの歴史的前提に関する学際的研究』(平成12年度—平成14年度科学研究費補助金・基盤研究(A)(2)研究成果報告書) 2003年。
- Gari Ledyard, “Cartography in Korea”, J.B. Harley and David Woodward (Eds.), *The History of Cartography Volume Two, Book Two: Cartography in the Traditional East and Southeast Asian Societies*, The University of Chicago Press, Chicago and London, 235-345, 1994.
- 高橋正「東漸せる中世イスラーム世界図」龍谷学会『龍谷大学論集』第374号、1963年。
- 宮紀子「『混一疆理歴代国都之図』への道——14世紀大明地方の『知』の行方——」藤井譲治等編『絵図・地図からみた世界像』、2004年。
- 田中健夫『『海東諸国紀』の日本・琉球図』『東アジア通交圏と国際認識』吉川弘文館、1997年。
- 申叔舟(田中健夫訳注)『海東諸国紀』岩波文庫、1991年。